

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



七枚ほどの便箋が、女の書き慣れた字で埋まっていた。差出人は、栗原槇子と名乗っていた。もちろん、万作に心当たりはなく初めて目にする名前だった。

読みながら、やはり昨夜はどうかしていた、と万作は肩の力をぬいた。昨夜は読み進むうちに、おっ、と声をもらし、落ち着け落ち着け、と高ぶる思いをおさえていた。その時の感覚が今もまだ身体に残っているのだが、一晚眠って、醒めた頭で手紙を読み返し、なんだこんなことか、と今朝は冷ややかに内容を受け止めていた。ちよつとかじつた史実や身に起こった事故や事件で、自分の不遇をそれらのせいにし、納得しようとする。だれにでもよくあることである。

胸が高鳴ったのは、夜桜と酒のせいだと万作は思った。

そもそもこの歳になって、この身に一体何が起きるといふのだろう。万作はふくらみかけた期待を握りつぶすかのように手をあごにあて、宙を睨んでいた。そして便箋を放り出し、書棚の谷間に寝転がった。

栗原槇子は、万作へ手紙を出すに至ったいきさつをおよそ次のように書いていた。

昭和五十一年のことである。

奈良の大学で東洋史を専攻し、「一遍と浄土教」を卒業論文のテーマに選んだ

槇子は、夏休みに松山へ帰省したおりに、一遍の生誕地と伝えられる道後の宝

厳寺ごんじを訪ねた。本堂で一遍上人立像を拝観し、迫ってくる迫力にこころがふる

え、立ち去りがたい思いを味わった。そして庫裏に招かれた槇子は、住職から、江波万作の『一遍入門』という本を紹介された。

万作の処女作であるこの本との出会いは、彼女の人生観にちよつとした変化をもたらすことになる。おりしも、彼女を誰よりも可愛がってくれていた祖母を亡くして、まだ間もないころでもあった。

彼女は万作の本を何度も読み、遊行に果てた一遍という人物へ強い関心を抱くようになっていった。捨て果てるとは、いかなることか。通説、一遍が悟りを開いたという窪野へ行って見たかった。

冬休みに松山へ帰った槇子は、本の著者の万作に話しを聞くために、三度、道後のアパートへ訪ねたが、いずれも留守であった。三度目の時、槇子はその

足で道後駅からバスに乗り、松山市の郊外の窪野くぼのへ出かけた。窪野は四国山地の麓に位置しているが、急峻な丘陵の入口に丹波という少し開けた平地があり、ここが一遍の成道地と推定されていた。

バスを降りた槇子は、停留所の背後の高台で、「一遍上人窪寺御修行之旧蹟」と刻まれた石碑を見つけた。

三年間の修業をへて、一遍がついに悟りを開いた土地はここなのか、と彼女は感窮^{きわま}りじつと手を合わせていた。すると、どこからか老いた農夫が現れて、「あんた、一遍さんが成道したのは、ここじゃないぞな、もし」というのである。槇子はびつくりして、では何処なのかと農夫に尋ねた。

農夫は曲がった腰を伸ばし、突き出した手を左右にふりながら、「それは、いまはいえんけんな。いえんが、とにかくここじゃないわい」といい残し、踵を返すとすたすたと去って行った。ただこれだけのことだったが、農夫の言葉は槇子の中へぐっさりと突きささったままになった。

以来、物事がうまくいかなくなると、なぜか農夫の言葉が脳裏をよぎり、不安感がますます増幅されてしまうのである。

槇子は大学を終えて、他県へ嫁いでいたが離婚し、五年前から松山に帰って陶芸の窯を開いている。

昨年、彼女は新聞や街角のポスターで、松寿会の記念事業のことも知った。そのなかで、松寿会がこのほど一遍の成道地である「予州の窪寺」（「聖絵」）を窪野の丹波から新たに北谷^{きたたに}というところへ特定し、その地へ「窪寺閑室跡」碑を建立するという報道は、槇子にとって新鮮な驚きであった。

窪野は、槇子の仕事場からそう遠くない。なつかしさも手伝い先日、彼女は十三年ぶりに窪野にでかけてみた。

北谷の窪寺閑室跡地では、記念碑建立の基礎工事が始まっていた。槇子は仕事をながめながら、卒業論文を手がけていたころのことを懐かしく思い出していた。

槇子が下宿していた部屋の壁には、絵心のある彼女が自分で描いた「二河白道^{とう}図」が掛けてあった。かつて、一遍智真は長野の善光寺で写しとった「二河白道」の図を閑室の東壁に掲げて修業したが、聖絵にあるこの史実を槇子も真似ていたのである。

「二河白道」の図というのは、浄土教の教えをわかりやすく絵解きしたもので、人間の欲と怒り、迷いと罪を二つの河にたとえて、真ん中の白い道を修業の道として示した仏画である。

自分はどこで、白道を見失ってしまったのだろう、と槇子は工事現場を眺め

ながら立ちつくしていた。

そして、帰りの車の中で、槇子は再びあの農夫の声を聞いたのである。

「素人のなんの根拠もない予感ですから、どうぞ一笑にふしてください結構です。それでも、成道地だといわれる北谷の閑室跡地に立っていますと、誰かが私の腕をわしづかみにして、他所へひっぱっていく思いがしてなりませんでした。できるものなら、あの農夫にもう一度あって聞いてみたい思いでいっばいです。私にも、他のところではないかという予感がしてなりません。江波先生は、この北谷の地が本当に一遍の成道地とお考えなのですか。是非ご意見を聞かせてください」と槇子は万作に手紙で尋ねていた。

槇子の手紙を少し補足すれば、丹波は「予州の窪寺」といわれる寺院があった場所を、昭和五十年に宝巖寺の住職と松寿会の合同調査で推定したものであり、一遍智真の成道地として特定したものはなかった。したがって、手紙の中の農夫の言葉もあながち間違っではないのである。ところが、同じ窪野にある北谷の場合は、成道地そのものの特定であった。

したがって昨年の九月、松寿会が一遍智真の成道地である「窪寺閑室跡」を特定することに成功したという発表は、万作には奇怪そのものであった。川瀬道則が記念事業への思惑や功名心から来て、無理な特定をしたとしか万作には思えなかった。この特定にあたっては、川瀬からは何の相談も受けておらず、万作の立場は完全に無視されていた。

夕方、いつものスーパーマーケットへ寄ったついでに、かど庵をのぞいてみよう、と万作は思った。たぶん、今日あたりは倉田も店にもどり、静江の側にいるはずである。この手紙を倉田に見せるのも一興ではないか、と万作は思った。倉田の反応を見てみたい。槇子へ返事を書くにしても、それから十分な気がした。

万作は起き上がり、鉛筆を握る。

今朝は、書ける気がする。

小説「風のごとく」はいま、五百枚の予定が六百五十枚をこえていよいよ最後の章にさしかかっていた。